

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回も無しです。

解説 (既に存在する言葉について)

ありません。

解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 鍛心(たんしん)の間…文字の通り、心を鍛える為の部屋です。

この部屋は別名、明箱(めいばこ)と呼ばれています。

部屋は大体6 m 四方で、白で統一されています。

これとは別にもう一つ精神、心を鍛える部屋があるらしい。

~ 第68章 ~ <嵐の前の静けさ>

龍牙が部屋を出た後、気まずい雰囲気になっていた。

そんな中でプロフェッサーが口を開いた。

「凱歌。龍牙があんな感じになったのは何か、気になる事があったからだと思う。

でも、お前を助ける為に懸命だったのは事実じゃ。それにわしらにはそう時間は無い。

きなこさん共々、強くなってももらわなければならない。

キツイかもしれないが、鍛錬の続きを少しでもいいからしてもらいたい。」とプロフェッサーは落ち付きを払いながら言った。

凱歌ときなこは互いに少し間を置いた後で、「はい。」「お願いします。」と返事をした。

天山はその返事を聞くや、身を引き締めた。

蒼凱は静かに腕時計を見た。あの事件が僅か2時間にも満たない出来事だった。

『時間とは恐ろしいものだ…。これだけの事がたった2時間の出来事とは…。』

でも、だからこそ時間は貴重なんだよね…。さて、僕はどちらに行こうかな?』と蒼凱が考えていると…。

「蒼凱はもしもの為にこの事を報告書にまとめてくれ。」とプロフェッサーは言った。

蒼凱は「分かりました。」と返事を淡々としたものの、内心では『どちらに付いてもする事がないからラッキー。』と暢気に考えていた。

そして、それぞれに行動を開始した。

きなこは元の”武道場1”へと戻って行った。

凱歌達は部屋がかなり荒れてしまったので場所を変える事になった。

~ 第69章 ~ <再開>

プロフェッサーに連れられ着いたのは、大体6 m 四方の正方形の真っ白な何も無い部屋だった。

「ここはわしや天山が精神を鍛える為に使う”鍛心(たんしん)の間”又は”明箱(めいばこ)”と呼んでおる。

まあ、基本的に前者で呼ぶ事の方が多いが、龍牙がここでは鍛錬にならないらしくて、もう一つ部屋を使っている。その部屋の名、特徴等に由来して”明箱”と呼んでいる。

これから続きをしたい所だが、時間も押しておるからこの部屋の機能を最大に使って一気に上達してもらおう。その上、先程の事で自分を見直し、今までないほど精神を使いこなせる筈じゃ。」と凱歌に微笑み掛けながらプロフェッサーは言った。一息置いてから再び続けた。

「それではこの部屋の機能を説明する。

最大の特徴は、今は扉が開いている為に音が入って来ているが、一度扉を閉めると一切の音が遮断される。向こうからも、こちらからもじゃ。つまりここでは自分が発する音しかない。

そして、白く何もないこの部屋は、長い時間居る内に感覚を狂わせる。精神を蝕んでいく。

いかに自分を保ち、自分の中にいるもう一人の自分に打ち勝つかがポイントじゃ。

例えて言えば、武道でいう一人で型の練習をするのではなく、一対一の実戦練習を初っ端からするという事じゃ。

いいか、それは危険を伴う。いくらお前が卓越した精神力を持ち、それで幾度の出来事を乗り越えて来たからといって油断してはいかん。

わしや天山でさえ、気を抜けば危ない鍛錬法じゃ。辛くなったら、部屋を出て気を落ち付けるのじゃ。これは長くする事が自分を安定させる事に繋がるが、初めから無理をして自分を失っては意味がない。分かったかな？」とプロフェッサーは真剣に言っていたが最後の問いだけ急に優しくなった。

「分かりました。」と凱歌はプロフェッサーの真剣な態度に真剣に答えた。

そして、凱歌は部屋の真ん中で座禅を始めた。それを確認するとプロフェッサーは部屋を出た。

- 武道場1 -

きなこと天山は静かに”武道場1”に戻ってきた。

天山は静かに部屋の真ん中辺りに座り、きなこを自分の前に座らせた。

「色々あって何をしていたか忘れてしまったかもしれませんが、今回はきなこさんに自分の気の特徴を理解してもらおうと思います。

というか、それが一番手っ取り早く、効果的です。

それでは先程調べた事につけてをお教えます。」と天山はきなこにしっかりと声で言った。

きなこは不安な気持ちを押し殺し、静かに頷いた。

「先程行った事はきなこさんの中にある気がまずどれだけあるかとその気の”属性”を調べました。」と天山は言った。

「気の”属性”？」ときなこは訊き返した。

「ええ。気には大きく分けて3種類あります。

一つ目が破壊の気です。これは攻撃に適した気です。

二つ目が防御の気です。これは文字通り防御に適した気です。

最後が癒しの気です。これは相手の自己治癒力を高め、回復を助ける事が出来る気です。

更にそれとは別に気には”属性”があります。

人には様々なタイプが居ます。怒りっぽい人、自信のない人、凱歌の様に自分の感情を隠してしまう人など様々な居ます。

それは心が形を変えた気に影響します。その特徴を5つのエネルギーに例えます。

1つ目は”炎”です。これは聞いて分かるかもしれませんが、とても荒々しく周囲にも影響与えてしまうような強い破壊の気です。

二つ目が”雷(いかずち)”です。これは”炎”に似ているのですが、こちらは一言で言えば一撃必殺的な要素が強い破壊の気です。持っている人の特性から言うと、凱歌は恐らくこの”雷”だと思います。

これは孤高な者がよく持ちます。ですが、周囲を思う強い心を持つ人がより強くこの”属性”の力を引き出す事が出来ます。周囲に配慮ができ、的確なタイミングに的確な量の力を発揮する属性です。

逆に何でも全力で行くような感じの龍牙は”炎”の属性の気の持ち主です。

そして、ここからは種類が変わります。

三つ目は”地”です。これは大地の如く揺るぎ無い心を持つ方に多い属性です。

攻撃型というよりも防御の気です。そして癒しの気的能力も高いです。

プロフェッサーの気がこの”地”の属性です。何となく分かると思います。

四つ目は”風”です。これはそのまま”風”のイメージ通りですが、自由な奴の属性です。

破壊でもあり、防御でもあり、癒しにもなるけど、どれも優れている所がない属性です。

この属性は私の気の属性です。プロフェッサーに言われて自分でも納得してしました。

つまり、我々の気のバランスはなかなかなんなんですよ。

龍牙の”炎”を基点に、プロフェッサーが”炎”を燃える”地”を作り、私が”炎”の強弱を付ける。

しかし、”炎”を完全に止める人がいないので、暴走には気を付けないといけないんですけどね。

その”炎”を唯一止められるのが、最後の属性でもっとも世の中で持っている人が少ないとされる属性。

それは”水”です。

水は世の中に存在する物質の中で珍しい、簡単に三つの形に姿を変える物質です。

気体、液体、固体。この三つはそれぞれ違う特性を持っています。

それと同じで、”水”の属性の気は三者三様の特性を持っています。

この属性を持っている人は強い包容力がありながらも荒々しさ、冷静さを持つ人です。

そして、強い優しさを持つ方とされています。

きなこさんはこの珍しい”水”の属性の持ち主の様です。

運命というものはあるのだなと思いましたよ……。

龍牙が唯一愛した女性。きなこさんと同じ名を持つ青水きなこは、真の”水の女神”だったそうです。

最高の取り合わせだった様です。

但し、属性というのは鍛錬をしている内に変わってしまう事が多いんです。

気を極めるという事は自分を理解し、精神を操る事ですから。

理解する内に荒々しさが消えたり、出て来たりと変化が起こる事があります。

きなこさんの場合、今まで気を使った事がない、鍛錬をしたばかりですから変わる可能性があります。

私がきなこさんの中で見たのは、”水”というより”荒れる海”でした。

”水”の属性の中でも破壊の気にやや傾いている様です。

”炎”の属性に近い部分もあるのですが、冷静な部分もあるので。

きなこさんと凱歌の属性はなかなかなんですよ。強い破壊の気である”雷”と三者三様の”水”。

きなこさんの力で凱歌が生かすという、互いを高めあう良い取り合わせですよ。

しかし、これできなこさんが”水”と確定するし、凱歌が”雷”だとすると全ての属性が揃う事になる。

色々とはかどりそうです。ま、これからの鍛錬次第ですがね。」と嬉しそうに天山は説明した。

きなこはその天山の説明に嬉しさ半分、不安半分だった。

『自分はホイさんと比べてまだまだ劣る。』この事が心に強く刺さった。

天山はきなこが考えている事を見抜いていた。

「きなこさん。今考えている事は頭の中から捨てて下さい。もちろん他者と比べる事は成長には必要な事が多い。ですが、今回の事ではそれは逆に成長を妨げます。

ですから、凱歌を意識する事はありません。」と天山は真剣な表情で言った。

きなこは天山に思った事を見抜かれてしまった事に動揺した。

その動揺するきなこを笑顔で天山が見つめ直した。

暫し間が空くと天山は静かに口を開いた。

「それではきなこさんの属性を決定し、技術を高めましょう。」と天山が優しく言った。

きなこは頷くと、天山はそれを見ると真剣な表情に変わった。

「それではまず自分の中の力を感じ取り、引き出す様に鍛錬しましょう。」と天山は言うなり立ち上がりきなこの後ろに回った。

「いいですか。これから私が力を貸しますので自分の中に力を感じて下さい。

さあ、目を閉じて下さい。」と天山は静かに言うと両手をきなこの背中にかざした。

きなこも静かに目を閉じた。

そして、きなこは自分を見つめるチャンスを手にした。

- その頃…。

プロフェッサーは静かに”鍛心の間”の隣の部屋に入ろうとした。その時、龍牙が少し離れた所に立っていた。

「ちょっと話があるんだけど、いいかな？」と龍牙は遠慮がちに言った。

「ああ、いいぞ。今、凱歌が”鍛心の間”に居るからな。」とプロフェッサーは部屋に招き入れた。

龍牙とプロフェッサーは部屋に入るなり互いに様子を伺う様に沈黙したまま、しばらく時間が経ってしまった。その沈黙を破ったのはプロフェッサーだった。

「なぜ、あの時あんな雰囲気を残して部屋を出た？あれではその場に残された方は辛いぞ。」と龍牙に訊いた。

「あれは…。凱歌の考えていた事が何となく分かったんだ。それで。

その事でプロフェッサーに相談があってさ。」と龍牙は皮肉そうな笑みを浮かべ言った。

「相談？一体なんじゃ、その凱歌が考えていた事とは？」とプロフェッサーは興味津々そうな眼差しを龍牙に向け言った。

「これはあくまでも俺の感じた事等からの推測だが…。

凱歌は自分の心、記憶を見直した事で”あの方”の事を思い出したのかもしれない。

そして俺の姿を見て”あの方”との関係を訊こうとしたんだと思った。だがためらった。

これで、俺達が信じたくないが考えていた最悪のシナリオが現実のものだった事が証明されてしまった。」と龍牙は言葉を詰らされた。

「相談とは凱歌が訊いてきたらどうするかという事か？」とプロフェッサーは明らかに信じたくないというような表情で訊いた。

「それは一応考えた。俺と”あの方”の関係は人数を変えるが大体そのまま告げる。

だがそれ以上、”あの方”についての詳しい事は今は語らない…。

真実は常に正しいとは限らない。時とタイミングで天使にも、悪魔にもなる。これでいいと思うか？」と龍牙は言った。

「わしもその方がいいと思う。今は証拠も詳しい事もはっきりとはしていないし、この状況では酷過ぎる。

何せこの真実の対象者が少な過ぎる。ここはわしらの中にしまっておこう。

心を乱す事はこれ以上は避けたいしな・・・。」とプロフェッサーは静かに言った。

「それで相談というのは、さっきの事と凱歌ときなこさんの気の属性を聞きたくてね。

それで凱歌の気の属性は調べたか？」と龍牙は訊いた。

「おお、凱歌の属性か・・・。一応、見たんだがビックリしたぞ。

あやつ、相当の雷使いになれるぞ。じゃが、"あの御方"には勝てんがな。

しかし、素晴らしい素質じゃよ。きなこさんの方は分からないな～。」とプロフェッサーは言った。

「やっぱり凱歌は雷か。予想通りだったな。

俺の予想ではきなこさんは水かな。ただ負けん気が強いから炎に傾いているかもしれないが・・・。」と龍牙は言った。

「やはりあの時に二人の性質、属性を見抜いていたな。あの簡単な質問と手の平の確認の時に。」とプロフェッサーは言った。

「ああ、一応な。これからの準備の為にな。だけど、注意するのはきなこさんの方かな。変わってしまうかも。」と笑顔で龍牙は言った。

「いいや。きなこさんは水の心を持っておる。"あいつ"と同じ強さを持っている。」とプロフェッサーが笑いながら言った。龍牙もその言葉に少し納得した様に笑った。

その頃、"武道場1"ではきなこが自分の心と向き合っていた。

～ 第70章 ～ < きなこの心の闇 >

- 武道場1 -

きなこは天山に気を受けながら瞼を閉じていた。

きなこの意志は深い青でありながらも明るい水の底に居た。

静かに瞼を開くと、目の前には気の弱そうな少女が恥ずかしそうに立っていた。

きなこはその少女を見た事があった。いや、知っていた。

彼女は小学生時代、泣き虫だった頃のきなこだった。

少女はきなこに分かってもらえて嬉しかった様で笑顔を見せた。

「初めまして・・・。現実の私・・・。何か変だけど・・・。」とかなり恥ずかしそうに少女はきなこに話し掛けた。

「ああ、初めまして。」と状況が理解出来切れてないきなこは一応挨拶を返した。

「ここはね・・・。私達の"心の間"。意志を司る場所なの・・・。

そして私は貴方が一番嫌いだった時の自分。泣き虫で無力な自分。弱さの象徴。

だから私は自分を見直す為の案内人としてここに居るの・・・。」ときなこを恐れているような雰囲気ですら少女は言った。

きなこはその意味もなく脅える自分に怒りを感じた。

「もっとシャキっとしなさい！ どうしてそんなに脅えるの！」ときなこは怒鳴ってしまった。

少女はビックリして目をウルウルさせ始めてしまった。

きなこは慌ててしまった。いくら自分であっても子供が泣くのは見ていられない。

「ごめん、ごめん。つい、自分だと思つと頭に来ちゃって…」と少女の方に手を掛けて優しくきなこは謝った。

「どうして、“本当の自分”を隠すの？好きな人の前でさえも。」と少女は悲しげに問い掛けた。

「“本当の自分”？」ときなこは少女を見つめた。

「そう、“本当の自分”。女らしい自分、弱いと思っている所。でも、それは弱さじゃない…。

それは力なんだよ。この部屋の様に広く澄んだ心を持っている…。

なのに！貴方はそれを弱さだと思っている！その間違いに気が付いて欲しい！」と少女は顔を真っ赤にさせ、精一杯の声できなこに言った。

きなこは驚いた。この時の自分がこれだけの事を言うだけの勇氣を持っていなかった事をよく知っていた。

そして、自分が恥ずかしいからと目を背けていた事に目を向ける時が来た事を理解した。

「ありがとう…。ありったけの勇氣を振り洪ってくれて。気が付いた。自分が今何をすべきか。

天山さんが私を“荒れる海”と言った訳が。私が内にある“女らしい私”を認めないから乱れていた。でも、今は分かる。“女らしい私”と向き合い、理解してあげないといけない。

それが私が次に進む為になくてはいけない事。」と少女を感謝の眼差しを向けながらきなこは言った。

「良かった。やっぱり私だ。いつかなりたいと望んでいた自分になって。

もうここに居る必要はないよ。

必要なのは自分を認める事といろんな人がそれぞれに闇を持っている事を分かって欲しいの。

そしてここにも闇がある。そう、天山さん達が言っていた“夜叉”が。」と言うと少女の姿が薄くなり消えてしまった。

きなこは驚いて周囲を見渡したが少女の姿はなかった。しかし、頭の中に声が響いた。

『もうすぐやってくる。恐ろしい心の闇、“夜叉”が。でも、自分を見つめられるおねえちゃんなら勝てる…。』と少女の声が聞こえた。その時、きなこの背後に氣配を感じた。

振り返ると、そこには今の自分が立っていた。

「初めまして。主様。私がさっき話に出ていた“夜叉”って奴よ。予想と違ったみたいね。」と自らを“夜叉”を名乗るきなこは静かに近づいてきた。

きなこは確かに予想と違い、落ち付きのある“夜叉”に内心警戒を強めていた。

「そんなに警戒する事ないのに。主様が知っているホイさんの“夜叉”は私とは異なり特別なよ。

あいつはホイさんの卓越した精神力と本心は優しい心が自分の行ってきた事にひどく傷付いたせいで、あんなにも主と180度反対な恐ろしい奴になったの。

普通に生きている人間の心に出来る闇が形を得たとしても私みたいに主様に似ているの。

でも、特性は同じ。主様が大切、好きなものは大嫌いで壊したくしょうがない。嫌いなものは大好き。そして、いつかは体を手にしたいと思っている。」と“夜叉”は話ながらきなこの肩に手を回して微笑みながら言った。

きなこは素早く“夜叉”に手刀を振るった。しかし、“夜叉”は素早くそれを避け、飛び退けた。

「流石に自分だけあって当たらないか。」ときなこは呟いた。

「そんなに攻撃的にならないで。

今日は乗っ取る為に来たわけじゃないわ。ただ、主様と話がしたかっただけ。

第一、そんな力があつたら何も言わずに乗っ取るうとしてる。」と“夜叉”は宥める様に言った。

きなこはなんかカチンと来た。”夜叉”の方が大人の様に見えてからである。

しかし、それはしょうがない事である。

”夜叉”は自分の闇、影で主が自分に足りないと思っている分が型になる事もあるからである。

「一体話って何よ？」とぶっきらぼうにきなこは訊いた。

「それじゃ訊くけど。私は主のどんな闇から生まれたと思う？」と”夜叉”は微笑みながら問い掛けた。

『何からって。』ときなこは頭の中で問い掛けたが答えが見つからなかった。

「見つからないのも当然よ。見つかったら私はここに居ないもの。私は二つの事から生まれたの。

一つ目は無力感。これはどんな出来事からは分かるでしょ。

二つ目は小さい時から持っていた思い。”父さんの期待に答えられない”という無念さ、悔しさよ。

これも分かると思うけど、何を言っているか。という事は、私はこの姿ではおかしいの。

今は主様に気付いてもらう為に仮初の姿を取っているの。

あるべき姿、主様が幼い時望んでいた姿に……。」と言うと”夜叉”の姿が揺らぎ始めた。

きなこと同じ長い美しい黒髪が短くなり、体型も変化した。

そこに現れたのは何となくきなこに似ている男性だった。

「これが主様が幼い時からなりたっていた姿である、女だから無力と考えた結果だよ。」とやや高めの男性の声で”夜叉”が言った。

その姿にきなこは驚きを隠し切れない。

当然である自分がここまで男性になりたいと思っていたとはショック以外何もでもなかった。

しかし、幼い時の強い思いは大人になっても強い影響力を持つのは、当然であるのでそんなに驚く事もない。

ただきなこは、そんな精神科医が勉強して知り得るような人格形成の詳しいメカニズムを知るはずもなく強いショックを受けてしまった。

「自分の闇を見て、どう感じた？やはり私は”夜叉”ね。主様を倒して体が欲しくなっちゃった。」と言うと”夜叉”はきなこに向かってきた。

きなこは”夜叉”の攻撃を回避しながら、その強さに動揺した。

スピードこそ何とか勝っている感じだが、攻撃の重力感、勢いは”夜叉”が勝っていた。

しかし、これが”夜叉”の全力とは思えなかった。

きなこが迷っていると”夜叉”はためらいなく蹴りを腹に入れた。苦痛で顔が歪んだ。

更に”夜叉”は間を与えずに攻撃を続けた。きなこは必死に攻撃を防御しつつ攻撃を繰り返すがどれも大して効かない。

きなこの中に焦りと悔しさが満ちてくると、”夜叉”は笑い出した。

「そうだ。悔しさ、無力感に飲まれるがいい。それは私を更に強くする。」と”夜叉”は言った。

きなこはその言葉を理解出来なかった。というより理解する間を与えなかった。

『おねえちゃん！自分の心に素直になって！ここでは力じゃない、思いなの！

ここでお姉ちゃんが負けたら、一番に悲しむのは誰？一番大切なのは誰？』と少女の声が追い詰めれたきなこの頭に響いた。

きなこは『思い』と頭で呟くと、力任せに戦うのをやめた。感じるまま動き出した。

”夜叉”には少女の声は聞こえていないので突然の攻撃パターンの変化に動揺した。

それまで力に任せて攻撃していたのが”夜叉”の攻撃を寸前でかわし、”夜叉”の力を利用して攻撃してきた。

正に水のような流れるような動きだった。しかし、それでは勝てない。

相手もそれに対応してきてしまう。その時、きなこ達は背後に新たな気配を感じた。

二人は飛び退け合い、新たな気配の様を向いた。

～第71章～ < 敵それとも味方？ >

「天山さん！？」ときなこが言った。

「何だ。私の事は気にしないでいいですよ。私は傍観者ですから。敵でも味方でもない。」と腕組みをした天山は言った。

「傍観者だと。主が負けてもいいと言うのか？」と”夜叉”は訊いた。

「ええ。それもしょうがない事でしょう。きなこさんはそこまでの人だったという事です。

でもその時は私が貴方を消しますがね。我々の邪魔になりそうですから。」と本気とも嘘とも取れない声で天山は答えた。

「なら先に貴方を消すまで。」と”夜叉”が言い攻撃しようとした。

「私を倒す…。それは無理であり、筋違いもいい所です。私はここに存在しない。

分かっていない様だから言いますが、きなこさんがここに居られるのは私が外部から力を貸しているからです。私がきなこさんの精神を安定される為に気を送っているからです。ですから、私が力の加え方を変えたら…。もう分かると思います。この世界のバランスは崩れる。

貴方達の命は私が握っているのも同じです。こんな風に。」と天山は言い終え微笑むと、心の間が歪み、二人は苦しみ始めた。

「やめろ！本当に主の心を壊す気か！」と”夜叉”が怒鳴った。

「いいえ。そんな事はしたくありませんが、貴方が状況が分かっていないようなので分からせただけです。

きなこさん、ここは心の間。つまり、凱歌の精神世界と同じで意志一つで何でも出来る世界です。」と天山は微笑んで言った。

「全くもってその通りだ。ただその世界の存亡までお前が支配するな。」と新たな声が響いた。

三人が振り返ると二人の男が遠くから歩いてきた。

天山はその姿がはっきりし始めると、明らかに焦り始めた。

そしてきなこがその二人が誰か分かった。それは龍牙と紅髪の禍悪主だった。

「天山！きなこさんの補助の為に力を貸しておきながら、ズケズケと入って行って脅す奴が居るか！

まァ、俺も入ってくる点では言えた口じゃないけどな。」と龍牙が天山の首に右手を回し、締め上げながら言った。

「いや…。別に脅すつもりなかったんですよ…。少し緊張感を高めようと思って…。」と首を締められ苦しみながら天山は答えた。

「緊張感だと。このどこに緊張がある！

第一こいつら呆れてるぞ！まァこの男女の”夜叉”が男というのは納得するし、いいものを見せてもらったがな。」と禍悪主は不敵な笑みを浮かべながら言った。

「男女とは何よ！前にも同じ事言ったでしょ！その上、”夜叉”の事、納得とか得したみたいな事言わないでよ！」ときなこが禍悪主に食って掛かった。

そんな時、”夜叉”が笑い出した。

「やっぱり私はまだ主に向かっていくのには早過ぎた様です。

今の主は縛りが取れて秘められた力を発揮出来る。この状態では負けるのは確実。

主は素晴らしい仲間を持たれている。ここに居る人だけではない。耳を済ませれば聞こえてきますよ。私が“この世で一番大嫌いな相手”の声がね。それでは私はまた闇に戻ります。

でも、忘れないで下さい。私はいつでも主の席を狙っています。そしていつも隣に居ます。」と“夜叉”は言うときなこと重なり消えた。

きなこは驚いて自分の体を触った。

「ああ～“夜叉”め。諦めてあいつの中に戻りやがった。つまんねえ～の。」と禍悪主は本当につまんなそうに言った。

「そう言うなって。確かにあの“夜叉”には乗っ取りは早過ぎる。

本当は主の成長を望んでいたんだと思う。」と天山を離し龍牙は冷静に言った。

「それはそうですよ。いかに心の闇とはいえ、“夜叉”もきなこさんも同じ一人の人間なんですから。

ただ貴方達は別でけどね。」と首を押さえながら天山が言った。

「でも、“この世で一番大嫌いな相手の声”って一体？」ときなこが考え込むと、三人はくすくすとして笑い出した。

「何なんですか！知っているのなら教えて下さいよ！」ときなこが怒鳴った。

「えっ。本当に分からないんですか？じゃあヒントを言うと“夜叉”は主と正反対の感覚を持つ者です。

そう考えたら自ずと答えは出てくると思いますよ。その上、確かに聞こえていますからね。声が。」と天山は嬉しいように言った。

「でも、一体博士はどんな鍛錬をやらせているんだあ？こんなに強い思いが外部にまで届くとなると変だぞ。」と禍悪主は上目遣いで上を見ながら言った。

「恐らく“鍛心の間”で鍛錬をしているせいで気が高まっているのだと思います。

気は思い、心が姿を変えたものですから。

この世界に入ると元の形に戻るのかもしれませんが。」と天山が見上げながら言った。

全員が黙ると何となくだが声が聞こえてきた。

その声と言えるかさえ微妙な音を聞いた瞬間、きなこは“夜叉”が言った意味がやっと分かった。

それはきなこが一番大切に思い、守りたいと思う相手、ホイさんの声だった。

その声はきなこには音ではなく直接心にぶつかってきた。

きなこをどれだけ大切に思い、守りたいか。どれだけ自分のせいで傷つけたか苦しめたかが悔やまれる本心が流れ込んで来た。

きなこはホイの恥ずかしいのか、決して聞かせてくれないその純粋な思いを初めてちゃんと聞いて嬉しくなってしまった。

『私はこんなにもホイさんに愛されている』ときなこは内心ほっとしてしまった。

不安が多少なりともあったからである。

「しかし、ここまで行くと聞いている俺様達が恥ずかしいな。

俺達はそろそろ帰るか。」と禍悪主が言うのとてくと歩き出した。

「ちょっと待って下さいよ。きなこさん、凱歌にも言いましたが心の間を探索すると自分を見直せますよ。」と龍牙は言うときと禍悪主を追い掛けた。

「全くあの二人は何をしに来たんだか……。私も言えた口ではありませんがね。

きなこさん、龍牙が言った通り、この心の間には色々なものが詰っています。

それを見る事はいい事ばかりではなく、つらい事もあります。でも、それは自分を高めるきっかけになり

ます。

それでは私は外からきなこさんを支えますから、終わったら”戻りたい”と望んで下さい。そうすれば戻れますから。」と天山は言うのと歩き出した。

～第72章～＜女・母の力＞

きなこはホイの思いが三人に聞こえていた事に恥ずかしくなって固まっていた。

三人の姿が消えるときなこは龍冴と天山が言った事を考えていた。

『探索って言ってもどこをどうしたらいいの？』と思うと突然隣に男の子が立っていた。

「わぁ！君、誰？」ときなこは驚いて言った。

その男の子はどことなく龍冴に似ているような気がした。

「初めまして。まず言いますと僕はきなこさんの心の欠片じゃありません。

何となく僕の姿を見て気付くかもしれませんが、僕は龍冴と禍悪主の心の欠片みたいなものです。

僕の名前は零です。彼ら二人を監視する者です。言い方を変えると精神世界の住人です。

凱歌さんの心にもお邪魔してけど、きっと困っているんじゃないかと思って。」と零は笑顔で言った。

「ホイさんの心の中にも行った事があるの？」ときなこは零に訊いた。

きなこが零を信じられたのはそれはその真っ直ぐな眼差しだった。純粋でどこかホイに似ていた。

「はい。きなこさんが助けに来た時とその前に一度の二回です。

でも、龍冴は僕の存在を知りません。禍悪主は僕の事を知ってしまいましたが。

本来なら二人とも知らないはずですが、気付かれてしまいました…。

つまり僕の事を知っているのは禍悪主、凱歌さん。そしてきなこさんの三人だけです。

こんな僕ですけど、それでも龍冴と禍悪主と元は同じ人格ですからきなこさんを助けたいと思ってます。

でも、僕は自分では体を使う事が出来ません。つまり表に出られないのでこんな事でしか助けられませんが、僕に心の間を説明させて下さい。」と零は質問に答え、説明をした。

「じゃあ、お願いしちゃうかな。」ときなこは少し考えてから言った。

零は嬉しそうに笑みを浮かべると、凱歌に説明した様に丁寧に説明をした。

きなこは分かったらしく、周囲を見渡していた。

説明を一通り聞き終わるときなこが口を開いた。

「ねえ、零君はいつも何しているの？」と目線の高さを合わせて零に訊いた。

「いつもですか？龍冴が表に出ている時は、禍悪主が勝手に表に出ない様に抑えたり、心を安定させるんです。

一つの体に二つの心では二つの心がぶつかり合ってバランスを崩れてしまいますから。

それを防ぐのが僕の生まれた理由で存在理由です。

でも、二人の距離はどんどん縮まってきています。

段々二人は混ざり合って、その内二人は完全に一つに戻ります。そう、あるべき姿に。

その時こそ僕が役目を終える時で、名前通りゼロに戻るんです。

その時が待ち遠しいです。やっと二人を監視しなくて良くなる。

二人にちゃんと会えるの時だから。最初で最後だけど…。」と零は嬉しさと自分が消える事という複雑な胸中を明るく振舞いながら話した。

そんな零をきなこは自分の子供を抱きしめる様に優しく抱きしめた。

零は予想していなかった事に驚いた。

「寂しいよね。いつも一人であの二人を、したくもない監視をしなくちゃいけないで…。

やっと二人に会える時は別れの時だなんて…。」ときなこは零の辛さが少しでも減ればと思った。

「ありがとうございます、きなこさん。でも僕としては無くなってしまうけど、完全に消えちゃう訳じゃないよ。今度はちゃんと主人格の一部になれるんだから。

きっとこの事は忘れちゃうかもしれないけど、僕は新たな人格の一部として今度は外で皆の力になれるもん。だから、そんなに悲しまないで。じゃないと僕…。」と零は言葉に詰ってしまった。

その目には涙が溜まっていた。段々と色々な事が込み上げたらしくきなこの胸の中で泣き始めた。

きなこはその孤独で誰にも知れずに頑張ってきた零の辛さを癒してあげたいと強く思った。

そしていつか同じ孤独に色々な事に耐えてきたホイの辛さを同じ様にしてあげられたらとも思った。

それは自分が持っていないながら気付かなかった”女性として力”だったのかもしれないと僅かながらきなこは感じた。

しばらくすると零は泣き止み、落ち着けを取り戻した。

「ごめんなさい。僕が助けられちゃったね。でも、嬉しかった。初めて抱きしめられた。

僕はね。禍悪主…。というか分かれる前の僕達の幼い時が原型になっているんだ。

ちょっと驚きでしょ？あの禍悪主が僕みたいな子供だったんだよ。

といってももう5歳の時には、人を殺めていたけどね…。

もう知っていると思うけど、僕達にはお母さんと呼べる人が居ないんだ。

だからこんな風に抱きしめられたの本当に初めてなんだ。

お母さんってこんな素晴らしいもの、いいものなんだって分かって嬉しかった。

本当にありがとう。きなこさん。

凱歌さんにも頼んだけど龍牙はもちろんだと思うけど、禍悪主も見えて欲しいんです。

あんな考えと、性格をしているけど本当は人を信じたいんだと思う。

でも、信じられるような人を見た事がないんだと思う。そして、誰からも信用されない事ですますすひねくれちゃって…。だから！」と零は声を大きくするときなこは零の口を塞いだ。

「本当に零は優しいのね。自分より二人の事を気にする。

私も分かる。きっと禍悪主のような人生を送ってきたら誰も信じられないと思う。

人の醜い所しか目に付かなくなっちゃうし、人は居ない方がいいと考えちゃうと思う。

でも、禍悪主がどこかで誰を助けたいと思っているのも何となく分かる。」ときなこは言うと、

ホイを助けに精神世界に行った時の禍悪主の言動、行動を思い出していた。

「だから、私みたいなので良かったら禍悪主を、龍牙さんをそして零君を信じる。」ときなこは真剣でありながら優しい眼差しで言った。

零はその答えが嬉しくて満面の笑みを浮かべた。

その時だった。

「いつまでほっつき歩いてるつもりだ！あんなに遅いから迎えに来たぞ。

全く俺様達を監視するはずの奴が居なくてどうする。

どうせあの甘ちゃんじゃお前に逢えないから俺様が迎えに行かざる負えないだろうが。

さっさと帰るぞ。番人！」と禍悪主が言った。

その姿を見るや、二人は顔を見合わせ微笑んだ。禍悪主は二人の行動を気にせず歩き出した。

「それじゃあ、僕は戻るね。

きなこさん、死なないでね……。忘れちゃってると思うけど僕が主人格になったら今度は外で会おうね。
あと、僕の事は龍冴やみんなに内緒ね！」と零は言うど禍悪主を追い掛けた。
『待ってよ。たまには優しくしてよ。』と零が言いながら無視する禍悪主の後ろを歩いて行った。
正に歳の離れた兄弟のような光景だった。

きなこは確かに龍冴と禍悪主の距離が縮まっているのを感じた。
初めて禍悪主を見た時は、人ではない様にさえ感じた。何者も認めず全てが単なる物の様にしか
思っていなかった感じがかった。
しかし、今の禍悪主は段々人間ぽくなってきている。むしろ龍冴の様になってきている。
逆に龍冴が禍悪主の荒っぽさが出てきたような気がした。
一つになった時の性格が気になったと同時に不安になった。龍冴の優しさに、禍悪主の荒っぽさ。
考えただけで怖い。

きなこは二人が見えなくなると、心の間を見渡した。
先程までは見えなかった扉がちらほら見えていた。
その扉に向かって歩き出した。それは自分の変える為の、成長の為の一步だった。

- 現実世界 -

龍冴は意識を取り戻すと邪魔をしない様に静かに部屋を出ていた。
それから30分ほどしてきなこが目を覚ました。
「お疲れ様でした。色々と自分を知る事が出来ましたか？」と天山は訊いた。
「はい。自分の事、ホイさんの思い、他にも色々と。」ときなこはすっきりとした顔で言った。
「そうですか。私も頑張った甲斐がありましたね。
さてそろそろ本題に入りますか。
心の整理がついたせいか、気の属性も安定しましたから変換も容易なはずですよ。」と天山は笑顔で
言うときなこを立たせた。
それから夕方まで太極拳の型、気の使い方を体に叩き込んでいった。

- 鍛心の間 -

凱歌は静かに心を落ち付けて自分の内にある雷のような気を感じていた。
その光景を見ていたプロフェッサーは凱歌の卓越した精神力に開いた口が閉まらないような驚きを
覚えた。
なぜならこの”鍛心の間”はプロフェッサーや天山のような上級者でも4時間が境界点である。
それなのに凱歌は初めてにして、2時間半を越えようとしている。
『これは下手をすると今日中に気の純度を最大まで高められるかもしれん。』とプロフェッサーは自分の
予定の甘さを痛感した。それから凱歌は夕方までに、3時間間隔で休憩を入れながら、座禅を続けた。

こうして、二人の問題の山積する鍛錬1日目が終わった。
二人はその日、顔を合わせる事はなかった。
あまりの疲れから鍛錬が終わるとそれぞれに用意された部屋へ直行してしまった。

しかし、それはこれから起きる嵐の序章だったのかもしれない…。

- 続く